

観光による地域経済の活性化・船旅のススメ

上村敏之 教授（財政学）

1. はじめに

財政を研究する私が、地域の観光としてイメージすることは、残念ながらあまり明るいものではない。1990年代にバブル景気がはじけて以来、雨後のタケノコのように、各地に乱立したテーマパークや遊園地などの箱モノは、いまや多くが閉鎖に追い込まれた。鉱山から観光での再生に賭けたことが、北海道夕張市の財政破綻の引き金になったことは、あまりにも有名である。

すでに日本は人口減少社会に突入している。国と同様、地方自治体の財政も厳しい。短絡的な箱モノ思考からは脱却せねばならないが、いかにして地域の外から人を呼び込むかという視点は、「町おこし」には今でも必要である。「ゆるキャラ」や「B級グルメ」も、イベントで地域外の人を呼び込めることに、地域活性化としての意義があるのだ。

筆者の専門は観光ではない。だが、旅は大好きである。その偏った経験から、日本における今後の観光と地域の経済について考えてみたい。カギとなるのは船の旅だと思う。

2. 高齢社会に適した船の旅

ヨーロッパ諸国をクルーズ船に乗って巡る旅を、幾度か経験したことがある。列車や航空機での旅も好きだが、船の旅は格別だ。船の旅は完全に旅なのである。だいいち、ビジネス客はまずいない。純粋に観光を楽しむのが、クルーズ船の旅なのだ。経験したことがないと、この感覚は分からないだろう。

日本でクルーズ船の旅といえば、一部の富裕層が楽しむものというイメージがあるようだ。確かに、日本のクルーズ船ツアーの料金は、かなり割高である。だが、少なくともヨーロッパではそうでない。富裕層が楽しめる豪華クルーズもあれば、気楽に乗船できるクルーズもある。時期によって価格帯にも幅があるし、1泊や2泊のような短期クルーズもある。

筆者自身は、船の旅こそ、根本的には言わなくとも、ある程度のインパクトをもって今後の日本の観光のあり方を変える起爆剤になるのではないかと考えている。なぜなら、船の旅は、特に高齢者にとっては都合が良いからだ。

言うまでもなく、日本の人口構成は高齢化している。高齢者になれば、健康にも気を遣わないといけない。とはいえ、なかには元気な高齢

者も多く、時間もあれば貯蓄を多くもつ者も多い。様々な統計で、世代別の金融資産保有の分布が高齢者ほど多くなることが示されている。今後の観光のターゲットが、高齢者であることは間違いない。

クルーズ船は、いわば「動くホテル」である。運動能力が落ちた高齢者にとって、荷物をもちながらホテルからホテルへの移動は、おっくうになりがちだ。だが、クルーズ船ならば、部屋に荷物を置いたまま、「ホテル」自体が動いてくれる。

クルーズ船は朝に観光地近くの港に寄港する。朝食を終えた乗客は船から降りる。港町には、乗客目当てのマーケットが広がっている。乗客は、その土地の物産を楽しむ。大型クルーズ船なら、数千人の乗客を載せている。数千人の乗客が港町のマーケットに定期的にやってくれば、地域に与える経済効果は計り知れない。ヨーロッパの観光地には、クルーズ船の乗客を取り込む地域がたくさんある。

海に面した港町しか、クルーズ船の恩恵にあずかれないかといえば、決してそうではない。乗客の一部は観光地へ向かう。大型バスや新幹線を使い、港から数時間以内で移動できるなら

ば、十分に観光の対象になりうる。関西圏でいえば、クルーズ船が寄港するのは神戸港と大阪港だが、そこから京都や奈良への移動はさほど問題ではない。

なかにはクルーズ船に留まる者もいる。船内には、各種料理のレストランはもちろん、プールやジム、図書館やビジネスセンターなどもあり、滞在することもまた楽しみだからだ。観光地に向かった観光客は、夕方の出港時間までには戻ってくる。

クルーズ船は、次の観光地近くの港へ出発する。夕食はレストランで食事をし、動く夜景を眺めながらワイングラスを傾けることもできよう。夜の船内では、ダンスパーティー、観劇、絵画などのオークションなど、様々なイベントがある。日本では禁じられているが、海外のクルーズ船では、必ずといってよいほどカジノも開催される。

旅行は、地点から地点への移動をとまなう。行き先の地点にて、何らかの観光を楽しむことも、もちろん大事である。だが、船の旅が、列車や航空機の旅と決定的に違うのは、船の旅がプロセスを重視することにある。

行き先での観光を楽しむ人が、プロセスを楽しめない、もしくは楽しもうとしないことは、よくあることのように思える。しかし、船の旅を選ぶ人は、地点での観光はもちろん、プロセスを楽しめる人でもあるのだ。

旅の楽しみ方は様々である。体力のある若いうちは、観光スポットを回ることに勢力を注ぐのもよいだろう。だが、体力の衰えた高齢者はそうはいかない。旅の移動というプロセスをいかに楽しむのか。この点が、旅の楽しみ方の大

転換になるし、地域経済の活性化にとっても重要な視点なのだ。

3. 船旅で地域経済の活性化を

伊能忠敬は17年かけて日本全国を測量したという。さすがに普通の高齢者は、17年もかけて日本全国を一周するわけにはいかない。ならば、クルーズ船を使った日本一周はいかがだろう。だが、日本一周クルーズの価格はまだまだ高い。郵船クルーズ株式会社のクルーズ船「飛鳥II」による日本一周クルーズ（横浜発もしくは神戸発）は、最低価格でも60万円程度である（2011年9月現在）。

価格が高い理由は、日本のクルーズ業界が、あまり競争に晒されていないことにも原因がある。昨今、航空業界においては、海外のLCC（ロー・コスト・キャリア）が日本の空港にも進出し、低価格でチケットを販売している。空と同様に、海にも海外のクルーズ船が参入すれば、日本の船の旅はもっと手軽になってくるだろう。

価格が下がれば、眠っている需要が掘り起こされ、リピーターも増える。船の旅がメジャーになることは、高齢者だけのためではない。業界が発展すれば、それだけ雇用は増える。船の観光客を受け入れる地域にとっても、箱モノに頼るよりはリスクは少ない。

日本の近海にクルーズ船が巡るようになるには、規制緩和とともに、経済界、地方自治体、地域が一体となった取り組みが必要である。海外クルーズ船が来れば、アジア諸国の富裕層も日本を訪れるようになる。日本の周辺諸国では、平均所得が上昇している国が少なくなく、富裕

層が出現している国もある。海外クルーズ船は、彼らをターゲットにすることも重要であろう。日本は高齢社会かつ島国で経済は停滞している。一方、周辺諸国は大きく変貌している。国内の高齢者と海外の富裕層を取り込むために、船の旅はもっとクローズアップされてもよい。まずは、日本に住む私たちが、船の旅を楽しむことから始めてみてはいかがだろう。

4. 大学生のみなさんへ

紙面の都合で高齢者の話に偏ってしまったが、筆者は大学生にも船の旅を勧めてみたい。ほとんどの大学生にはお金がないかもしれないが、社会人よりは圧倒的に自由な時間をもっている。高価な豪華クルーズ船とはいかなくても、手軽な船の旅を探して体験してみてもどうだろう。

坂本龍馬が大きなスケールで物事を考えることができたのは、彼が海に接していたことに大いに関係がある。社会に旅立つ大学生こそ、壮大な海に囲まれる時間をもつことが大事なのだ。海を眺めれば、自分の人生を見直すきっかけになる。次の長期の休みを使って、いまずぐ企画してみてもいいかが。

5. 付記

本稿を書き終えた頃、ニュースが飛び込んできた。世界最大級のクルーズ船「ボイジャー・オブ・ザ・シーズ」が、2012年夏に4度、神戸港に寄港するのだ。乗客数は最大5000人で、なんとスケートリンクも備える。1泊あたり約1万円（食事込み）の安さは、まさに黒船である。気になる人は検索を。